

---

# 夢の中の学園生活

原間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の中の学園生活

### 【Nコード】

N0384F

### 【作者名】

原間

### 【あらすじ】

超エリート学園、国立鳳凰学園。そこに通う生徒達（一部）の支離滅裂で破天荒な日々。恋愛したり授業をサボったり開発したり脱走したり……、グダグダの青春やってますが、とにかく僕等は生きていきますッ!!

## ブローグ

時は今より少し未来

その世界の日本には、一つの国立学園が存在していた

山一つ分の土地を使って作られた大きな町の様な学園。特徴は幼稚園から大学まで存在し、全寮制度、そして超エリート校

偏差値平均80の優秀な生徒達と、それぞれの学問で権威を持つ教授直々の授業

そこは現実から個別された世界だった。学園内はほぼ自由に暮らせるのだが、外の世界に出るとなると異常に面倒で厳しい書類を書かなければならない

その為学園生達と現実の世界の人々の交流は卒学するまで全く言っていないほど無い

だから、その学園は現実の世界が憧れる世界だった

そんな学園に通う、頭の良い悪戯好きの子供達の話

「キョウクーン……そろそろ帰ってくれないかなあ……、俺達授業あるんよ」

「ゴメン……キリュお兄ちゃん、今僕の耳の粘膜はブリッブリ破けて何も聞こえないんだ……」

「グロいつてキョウちゃん、そーじゃなくてどうせなら耳を怨霊に取られちゃったにしようよ」

「いやいや……そっちの方がずっとグロいと思うよ鈴くん」

「え、そうかなあ？そうなのキョウちゃん、私にはキョウちゃんのよりグロくないと思うけど」

「僕は同じくらいグロいと思うよリンちゃん」

此处、大学生寮のある一つの部屋ではこんな賑やかな会話が繰り広げられていた

元々この学園の寮制度では一室に二人の学生が暮らすという決まりがある

それ以外はほぼ自由だ、消灯時間さえない

勿論、立入禁止などという厳しい決まりさえないのだ

なので、どんなに小さな子供でも立ち入りは許可されていた

この部屋では今、二人の大学生と小学生の双子の兄弟が居た

この四人と後二人を加えたグループが、今学園で一番有名なグループだ

六人とも成績優秀に加え、容姿端正、そして何よりこの学園のイメージと全く違う悪戯好きという嗜好の持ち主だったからだ

六人の世代はバラバラだ。双子は小学二年生、二人は大学一年生、一人は中学三年生でもう一人は高校二年生だ

どうしてこの六人が出会ったかは未だ不明ではあるが、かなり仲がいいのは確かだ

そして六人の集会所は此处、大学生の二人組の部屋であった



## 第一話 自己紹介を始めましょうか？

俺の名前は桐生 亮介、きりゅうりょうすけ国立鳳凰学園大学一年生だ

得意分野は国語と歴史、まあ文系だと思う

で、性格は楽観主義にマイペースだとよく言われる

見掛けは結構自信ある、ストレートの黒髪に黒目、肌は健康的な色で背は標準より少し上の176センチ

ファッションはあまり興味ないからいつも同じ様な服を着ているけど、同じ様な服だけで同じでは無い

それだけは忘れないでほしい。俺の、まあ俺の親友達は俺の服を同じだと言うからだ

だが断じて違うのだ、俺はコレでも潔癖性を自称している

俺に言わせれば、風呂に三日も入らずに過ごしている双子とか髪の毛ボサボサの老け顔の方がずっと不潔だ

「おっはよーキリュちゃん、元気ー？」

「おはようヨバ、お前俺の同室なんだから元気かどうかなんて普通にわかるだろ？」

「えへへ、確かにそうだねーっ」

此奴の名前は四ツ葉 ヨツバノキク 菊、俺と同室で同学年で数学科の男子生徒でもって滅茶苦茶頭のいい奴

しかも見掛けも悪くないからもう嫉妬したいくらいだ、まあ、嫉妬できない性格をしたいるが

四ツ葉は俺達グループの間ではヨバと呼ばれている、つーか勝手に呼んでいる



俺の中では実に可哀相な渾名だが、当の本人はニコニコ笑顔だ、つまり天然馬鹿だ

俺だったらヨバーなんて呼ばれたら激怒してしまいそうだが、どうやら人の感覚はそれぞれかなりの差があるらしい

ビックリだ

まあ、キリュなんて中途半端な渾名を貰って怒らない俺も同じだが

……

結局はあのネーミングセンスゼロの双子が好きだから、こんなやな渾名でも俺もヨバも怒らないかも知れない

真相なんざ知らないが

「キリュちゃんツ！僕元気だよーっ」

わかるさそんなこと、背中に思いっきり飛びつかれればな

さて、第二反の備えて防衛せ      「キリュちゃんっ！私も実は元気だよーっ」

遅かったか……

双子は顔が同じ、つまり一卵性双生児だった。そして最初に俺に攻撃基……飛び付いてきたのは自称キョウちゃん、確か此方の方が弟だったと記憶する

もう一人は自称リンちゃん、だから双子の兄弟の兄の方なのだが精神年齢的にはキョウウの弟である

双子は一卵性双生児らしく同じ背丈に顔、ほぼ同じ性分と性格の持ち主だがやっぱり違いはあった。まあハッキリ言っちゃえばその性悪さは同じ度合いだったことだ、この双子は時と場所と状態によって性格を変える

俺が怒っているときは勿論ちゃん付けではなくお兄ちゃんと呼ぶのだ。全く狡賢い奴らだよ

まずキョウウの方は黒髪黒目で髪は男にしては長い方だがボサボサで癖っ毛、それに加え分厚い眼鏡を掛けているため少々細目気味

リンの方は淡い茶色の髪の毛に黒目、そして髪の毛はキョウと違ってストレートで後ろで一つに縛っている、そして目はクリックリのドングリ眼だ

双子の家族構成はかなり複雑なモノらしい、二人はどう考えても同じ顔の人間だが、姓が違う

キヨウの本名は宮本恭輔みやもと きょうすけ、リンの本名は原林太郎はら りんたろう

どうやら両親が離婚して子供を一人づつ連れて行ってしまったらしいのだ

出会ったのはこの学校の幼稚園でだったらしい、大した皮肉だ

が、それを全く感じさせないのがこの双子の特徴だと思う。普通は恨むよな、実の兄弟を切り離してそれぞれ愛人の所へ連れて行ってしまった両親なんて

でもこの双子は自分の片割れとの再会を本気で喜んでるんだよ、こういうところだけとても純粋な子供なんだ此奴等は

「ヨバちゃんもおはよう」

デュエットで聞こえたその元気な挨拶、殆ど同じ声、この声を聞き分けられるのは自慢なのだが俺だけだ

微かに違っただよ、微かな。声は同じだが言っている人間の違いだろっなきっと

そんなことを暢気に考えながら痛みを回復させていくと、突然後ろから声が拳がる

それとともに俺は全く関係のないことを思い出した、ヤバイ、授業に遅れる

俺達がどうして今この廊下をノートと筆記用具片手に歩いているかというと、そういう訳があったのだ

「すみませんっキリユさんッ！」

「ホントすみませんッ授業遅刻させちゃってッ!！」

双子と違って全く違う声が二つ言う

そうかそうか、もう授業は開始していたか……

俺は規則を破って小走りに近づいてきた二人の高校生を満面の笑顔

で迎えた

それにいかにも古風で強そうな二人が怯んだように見えたのは多分俺の見間違いだ、何処の世界に俺の笑顔で恐怖する奴がいるってんだ

二人は多分見間違いだろうが俺から出来るだけ離れた所を通りヨバと戯れている双子の首根っこを高校生の一人が掴み微かに持ち上げる

「何なのさケン兄ちゃん」

「痛いよ」

「僕等何もして無いじゃないか」

キヨウとリンは交互に文句を言いながらバタバタと手足をばたつかせて抵抗したが、元々格が違う。ケン兄ちゃんと呼ばれた高校生は双子と違って明らかに体格の良い武道派だ

実際にケン兄ちゃんこと山本賢二やまもと けんじは合気道と柔道の有段者だ。まあ、だからだろうかねえ双子はケンにだけは兄ちゃんと付ける

俺等にはちゃん付けなのはどうしてかなんて言つと巫山戯ているからとしか言えない

つまりケンはお巫山戯に通じない強者と双子に認識されていると言  
うことだ

いいねえ、羨ましいよ全く

やっとケンに離して貰えた双子はブスつとした表情でケンを見つめ  
る。多分年齢が同じだったら勝てたのにツとか思っているのだろう

それは普通に気付けるモンなのでヨバともう一人の高校生、リッ君  
は苦笑する

ちなみにリッ君は高村陸生たかむら りくおと言う男子高校生で、ケンと同じ高校二  
年生の剣道初段の持ち主だ

俺達のグループ、名前なんてないんだけど俺達六人組の高校生達は  
二人とも武道派なんだよ。ちなみに双子は知能派ね。だから俺等大  
学生組はあの四人のストッパーなんだよ、まあつまり凡人キアラだ

全く変なグループ構成なもんだと何度も思うよ、普通は年上の方が  
強いが知的で高校生組は少し特徴のある二人組で小学生達が保護心  
を掻き立てられるような子供なモンじゃないかね

それなのに俺達はグジャグジャなんだよ基本設定が、もう真反対な  
んだよ

「ヨバ、今からでも急ごうぜ。まだ何とか間に合うかも知れない」

俺の溜息混じりの言葉に、ムーっと双子は顔を見合わせお互い頷いて言う

言い始めはキョウからと決まっている

「無理だと思うよ?」

「ケン兄ちゃんとリツちゃんが来た時点でもうチャイム鳴ったし」

「あれからキリュちゃんがブツブツ言ってる」

「五分は経ったから」

「それに」

「キリユちゃんとヨバちゃんが受ける授業って」

「「物理でしょ?」」

「大学一年生の今日の物理って」

「確か」

「「抜き打ちテストするって学園長先生が嬉しそうに言ってたよ?」

」

サイアク

「よし、今日は全員でサボろうか……」





## 第二話 真夜中の集会

「キリュちゃんッ！」

「僕等の部屋に」

「来てくれないっ！！？」

暗闇に突然飛びだしてきた興奮気味の子供の声

目を瞑ってしまえば一人から発せられるようにも聞こえるほど似ている

全く……冒頭から随分元気な子供達だ、そしてその喋り方は止めてほしい

聞き取りにくいし、なんかムカツク、焦らされているみたいだ

まあそれは何度言ってもなおしてくれなかったのでもう注意する気にもならないが、今は夜の三時半だ、どうして此処に居るんだよ、

そしてどうしてこんな時間にご招待して下さるんですか双子さん

この双子にとつてはどうでも良いことだろうが、今俺は前サボったテストのお礼に貰った特別課題をやり終え三日ぶりの睡眠を取っている所なのだ

が、今完璧に目が冴えた

俺と取り敢えず溜息を付いて不本意だが少し興味が沸いてしまった双子の部屋の内装を見に行くことにした

連れてこられた昔懐かしい小学生寮、子供だから、なんて意味不明の理由で特別小さい部屋面積になんとか二階を付けたその細長い部屋。その横面積の少なさから普通の寮のドアとドアの間より三十センチほど短い距離

確か一階に三十部屋ほどあったと思うのだが、双子はその中の二十六番目の部屋のドアを空けた

途端に夜なのに地球温暖化など自律神経に問題でも起こるといふような問題を全く考えてないらしい双子らしい電気全快の部屋が飛び込んできた

ハッキリ言つて予想通り汚い部屋だ、掃除しろ

まあ……予想通りじゃないモノもあつた、というか居たのだが……

「「こんばんはー」」

高校生コンビだ、此奴等もきつと自律性調整障害になる可能性があるぞ、きつと

「どうしてお前等が此処に居るんだ」

「それは僕等と同じ理由だと思つよキリユ」

的確なツッコミありがとう、だが言つてみたいものなのだよ驚きながらもとてもイライラしていると

まあお前にはわからないだろうがな、あの三日間普段は成績優秀だからという酷い差別で一人だけ同室者も勞らずグーグー眠ってたお前には

「怖いってキリユ……、そのことはもう何回も謝ったじゃないか。それに僕だって……言い訳は聞かんぞ、いくら学園長が俺のこと嫌いでもそこまでは言わないだろう」

ヨバという奴はなんと自分が学園長に酷く脅されていたため課題を手伝えなかった言うのだ、もっとまじな嘘を付け

俺の殺気の籠もった視線にヒイツとヨバが苦笑する

畜生、もう流石に効かないか……俺の必殺脅し技

はあ、と俺も流石に飽きて睨むのを止めると双子と高校生がタイミング良く話し始める

此奴等にはまだ脅しが効くようだ

「でもキリュさん、それ意外に本当ですよ」

ちなみにこれはケンだ、此奴は俺に敬語を使う唯一の人間だ

「そうだよ、双子も聞いたって言ってたし」

こいつはリツ君、結構ヨバ属性の天然小僧だ。そして此奴はやはりヨバと同じで双子と仲がいい

話を振られて、双子はいつもの合図で顔を見合わせる。そしてお互い頷いて例の通りにキヨウから話し始める

「ヨバちゃん嘘言ってないよ？」

「本当のことだもん」

「「僕等学園長先生から聞いたもん」」

「『キリュは普段の生活態度も成績もイマイチだから』」

「『テストをサボっても普段成績が良くて生活態度もいいヨバと違う罰を受けて当然だって』」

「『だから特別参考書二冊分の課題出してやったぜ、しかも提出期限が三日』」

「悪かったヨバ、疑って……」

「いってキリュ……」

「『ヨバちゃん優し』」

今のはキヨウとリンとリッ君のデュエットだ

この餓鬼共、少しくらいいいじけさせるよ。俺だってお前等みたいに

堂々と鬱憤を晴らしたい

つと言うことで欲望に従い殴ることにした

「わっー酷いよキリュちゃんっ！！虐待だッ」

「痛ッ、痛いっスよキリュちゃんさんッ！！少しくらい手加減をっ」

五月蠅い餓鬼、俺は怒ってるんだ。少しくらいハンドバッグになれ

そして双子、友人を殴ることは虐待じゃなく暴力だ

「……、何で俺まで……」

悪いなケン、それは無かったことにしてくれや。ちよつとした間違  
いさ



「ッ~~~~~!!」

悪いなヨバ、それもちよつとした間違いだ。無かつたことにしてくれ

「では、少々遅くなりましたが」

「僕等の」

「「研究発表会を致しませう」」

「「イエーイー」」

パチパチパチ（無言で拍手の図）

「そんなことなら夜中じゃなくとも良かったらろつがあッ!」

ちなみに上からヨバとリッ君、ケン、俺の順番だ

もう此処まで呼んでくれたら俺等の役割を正しく認識できただろう

今思えば、ツツコミは俺だけだ。ヨバはツツコミ要員だった

「「「「夜中なんだから怒鳴るのは止めない?」」」」

「.....。ゴメンナサイ」



## 第二話 真夜中の集会（後書き）

桐生 亮介

年齢 十八歳

性格 少々柄が悪い、だが常識人で苦労性

見掛け アツサリ系の美男子、ファッションセンスが無いためいつもラフで無難な格好しか出来ない。

双子は結構気に入っていてヨバは小学からの腐れ縁

学力はこの学校での標準より少し上だが同じ『グループ』の人間が優秀なので悪く見られることが多い

喧嘩上等強者にや刃向かえの精神の持ち主、敵はこれ以上作らない方が良いでしょう判定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0384f/>

---

夢の中の学園生活

2011年1月7日02時45分発行